

「遠いところをようこそ。シリントレアからいらしたのは、あなたが初めてなんですよ」

客室に染み入った声は、予想外にも穏やかだった。ソファの上で身構えていたディルアローハの緊張も、幾分か緩むくらいには友好的だ。「先ほどそううかがいました」と小さく返事をして、目の前に座る人物をひっそり観察する。黒い髪を頭上でまとめ上げた壮麗の女性だ。くすんだ赤の長衣は、白を基調としたこの部屋の中では一段と目を引く。「このような若輩者を受け入れてくださり、感謝しております」

ディルアローハが軽く頭を下げれば、旅の前に切り揃えた亜麻色の髪が視界に飛び込んだ。シリントレアからここ二ーミナへの旅路は、女の足にはなかなか辛いものがある。これでも以前よりは道も補整され歩きやすくなっていると聞くから驚きた。——この五年ほどで、世界は大きく変わりつつある。

「そんなことはお気になさらず。ここは誰も拒絶しない国

ですから」

再び視線が合うと、女性はふわりと顔をほころばせた。この小国二ーミナを実質取り仕切っているといつても過言ではない彼女の名は、カーパルという。五十は超えていたはずだが、もう少し若い印象を受ける。

「ですが、不思議にも思っているんです。シリントレアは医療で有名ですよ。大國の援助も受けていますし、このような國をわざわざ訪ねてくる理由がわからなくて」

それでもやはり國の中核にいる人間だ。ちくりと痛いところを突かれ、ディルアローハは閉口する。

カーパルの言う通り、シリントレアから二ーミナを訪れた者は皆無だ。そもそも五年前までは、二ーミナはどの國とも交友を持っていなかった。そこをこじ開けたのが大國ジブルとナイダートだ。その際に何か事件があったのは確かなのに、詳細はディルアローハたちの耳には入っていない。

「いえ、それほどのものではないんです。それに我々は心

を癒す術を持ち合わせていません。そのために勉強に参りました」

困り顔を作ったディルアローハは、用意していた言葉を口にする。これ以上それらしく繕うのは難しかった。

ニーミナがウイスタリア教を国教とし、女神を信奉しているのは有名な話だ。一方のシリントレアは医術国家としての地位を確立する中で、宗教紛争を避けるための策が講じられた。それ以後、シリントレアの国民は神に祈ることを禁じられてしまった。結局は密やかによくわからないものに祈る結果となっただけなのだが。

「そうですか」

悠然と頷いたカーパルの言葉は、扉を叩く音で遮られた。小さな室内に響く軽やかなノックだ。何事かとティルアローハが視線を転じれば、開いた扉から黒髪の少年が顔を出す。目鼻立ちに幼さが残っているが、背丈はディルアローハくらいあるだろうか。彼はふわりと破顔してから部屋の奥に進み出てくる。

「失礼します、叔母様」

「クロミオ、今はお客様が」

「すみません。でもナイダートの使者がお怒りなんです。いつまで待たせるつもりだつて拗ねてますよ」

少年は大仰な仕草で肩をすくめる。白いシャツに黒いズボン、深紫のベストと、大国並みに上質そうな衣服を身につけている。ニーミナは貧しい国だと聞いていたから意外に感じる一方で、少年の名を思い返して納得した。彼ならば特別扱いされていても不思議はない。

「彼らはせつがちね。わかりました、今行きます。ディルアローハさん、お話の途中ですみませんがここで席を外しますね。クロミオ、彼女を部屋へ案内してあげて」

カーバルはゆつくりと立ち上がった。その声にはわかりやすく呆れの色が滲んでいて、こうしたやりとりが珍しくないことがうかがえる。大国の者の言うことは彼女も無下にできないのだろう。

「はい、叔母様」

歩き出したカーパルへと、少年——クロミオは丁寧な頭を下げた。礼儀正しい振る舞いからは、こうした場への慣れが見える。

「任せてください」

クロミオの返事を最後まで聞くことなく、カーパルは部屋の外へと飛び出していった。遠ざかっていく靴音が戸の閉まる無機質な音に掻き消される。するとクロミオはディルアローハへと向き直り、静かに近づいてきた。絨毯を踏みしめる柔らかな気配に、何故だか落ち着かない心地になる。

「お姉さんがシリントレアの人？ どうも初めまして、僕はクロミオ」

白いシャツに包まれた腕はまだほっそりしている。それをこちらへ伸ばしてくるものだから、ディルアローハは戸惑ってしまった。何を問うてよいのかわからず黙り込んでいると「お手をどうぞ」と声が続く。仕方なくその手を取ればくすりと笑われてしまった。

「そんなに簡単に他人に触れないですよ。ここではお姉さんを守ってくれる人なんていないんだよ？」

手を引かれ無理やり立ち上がらせられると、そんな言葉が降りかかってきた。子どもが何を言うのかと違和感を覚える一方、確かに警戒心が足りなかったと反省する。彼は要注意人物として名前が挙がっている少年だ。侮ってはいけない。

「ご忠告ありがとうございます」

立ち上がってみると、彼女の方が彼よりも少しだけ背が高かった。この華奢な少年はまだ成長期を迎えていないのだろう。声変わりはそのころか。確か十三歳だと聞いているから、十ほども年下になる。

「叔母様に頼まれたら断れないからいいけどね。ディルアローハってというのが名前なの？」

手を取ったまま歩き出そうとした彼は、一言で表すなら愛くるしい顔立ちをしていた。緩く波打つ黒髪に、この国の象徴である雪を思わせる肌。そして大きな瞳と薄い唇。

だがその深い黒の双眸からは感情が読み取れないし、浮かべる微笑も年頃の少年には不釣り合いだ。妖艶という表現がしっくりくる。——女神に愛された子どもだからなのか。

「ええ、そうです」

「いい響きだけど長いなあ」

「私の国では短い方です」

「そっか。でも呼びにくいのは困るな。ディルさんって呼んでもいい？」

扉の前まで辿り着いた彼は、ぱつと瞳を輝かせつつ振り返った。そんな風に愛称で呼ばれたことなど皆無で、彼女の顔はつい強ばりそうになる。気のない声を漏らせば、彼は一瞬だけ意地の悪い笑みを浮かべた。

「僕とは話したくない？ 叔母様じゃないと意味がない？ でもごめんね、叔母様は忙しいんだ。たぶんお姉さんの相手をしている時間はないと思うよ」

こちらの狙いはわかっているとも言いたげな言動だ。

この少年に接触して満足のいく情報を得られた者はいない、

という噂を思い出す。どの国の人間だろうと、ニーミナに派遣された者が接触を強いられる人物。ウイスタリアの女神に愛された少年。彼はこの国の番人の一人だった。

「だからちゃんとしたことが知りたいなら……僕のことを懐柔してよ」

彼は扉に手を掛けつつ悪戯っぽく笑った。何を言わんとしているのか飲み込めなくて、彼女は眼を見開く。

「覚えておいて。ここは誰も拒絶しない場所だけど、あなたの味方は一人もいないんだ」

朗らかな声で紡がれる言葉の裏側を、推し量ることなどできなかつた。これから待ち受ける前途多難な道のりを思うと、ため息がこぼれそうだった。

↓↓↓つづきは

《おねシヨタ》アンソロジー『Overtunity』で！